

2022/5/29

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑩

『ヨハネの黙示録 3章 ーサルデスの教会ー』

■ 信仰による行いとは

「また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」(黙示録 3:1)

サルデスという町の教会にあてた手紙です。「七つの御霊」は聖霊、「七つの星」は御使いたちを指し、それらを持つ方とはイエス・キリストのことです。これは、イエス・キリストは聖霊と共にあり、教会と共にあることを表しています。その方が、「あなたは実は死んでいる」と言っておられます。それは、「あなたは生きる信仰をいただいたのに、それが機能していない」ということです。信仰が死んだ状態とは、行いが無いということです。

「あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」(ヤコブ 2:6-17)

信仰による行いとは何なのでしょう。「行い」というと、人は一般的に「よい行い」を思い浮かべ、親切にする等の道徳的な行いを想像します。しかし、聖書は、どれほどの道徳的な行いも愛がなければ何の役にも立たないと教えています。

「また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」

(I コリント 13:3)

愛とは、神ご自身であり、一言で表すなら、それは「赦し」です。私たちが神と共に生きることができるのは、赦されたからです。神は、イエス・キリストの十字架によって愛を示し、赦し、私たちが苦しめている過去をすべて消し去ってくださいました。

私たちの苦しみは、すべて過去にあるものです。過去にこだわり、とらわれ、悔やみ、赦せない思いを抱く……、これが私たちの苦しみです。ここから解き放たれるには、過去を消し去るしかありません。

私たちを過去に閉じ込めたのは死です。悪魔にだまされ、人類に死が入ったことによって、人は有限になったため、過去が生まれました。この死を、イエス・キリストは十字架で滅ぼしたのです。その結果、過去も白紙にされ消されたのです。神の前にあるのは、「あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。」という事実だけです。ですから、神はあなたを裁かないのです。これが神の愛です。

自分が神の愛によって赦されたと知るなら、隣人に対しても同じように、この人も赦されていると信じなければなりません。私たちが人を愛する根拠はただ一つ、神があなたを赦し、隣人を愛しているからです。私は赦されているし、この人も赦されている、だから、私はこの人を裁くことができない……、これこそが愛の根拠なのです。つまり、私たちが人を愛することができるのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。この愛が根拠とならない限り、いくら人の努力で人を愛し、人を赦すと叫んだところで、自分を誇るだけです。しかし、本当に自分が赦されたことを知り、隣人も赦されていることを信じるならば、人を裁かないで受け入れることができるのです。これが愛です。

イエス・キリストを信じるということは、自分が赦された者であることを信じるということです。それは、同時に隣人も赦されていることを信じることです。これが人を愛することの根拠です。これが人も自分も裁かない根拠なのです。

ですから、伝道とは赦しを伝えることです。私たちがまことに隣人を愛すると、自分の心も相手の心も神様に向けることができます。これが伝道です。「愛がなければ何の役にも立たない」とは、人を神に導くことがなければ、その行いは何の役にも立たないということです。つまり、「あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」とは、伝道していないということになるのです。

自分が赦されていることを信じるから、隣人も赦されていることを信じて行動すること、それが伝道です。自分は赦されていることを信じるが、相手は赦されていないから裁くという行動は、間違っています。これが、信仰が死んだ状態です。信仰とは、神が私たちに赦したことを信じることです。それを信じるなら、誰のことも裁かず愛してほしいと聖書は言っているのです。そうすると、自分の心も相手の心も神に向かっていきます。私たちの信仰を確実にする一番良い方法は隣人を愛し、伝道することです。

「目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行いが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」（黙示 3:2）

「死にかけているほかの人たち」とは、伝道が困難なためにあきらめかけている人たちのことです。彼らを、隣人を愛せるように励ますなら、愛はまっとうされ、伝道はまっとうされます。隣人を愛するとは、相手が人を赦せるように励ますことです。「あなたは赦されたのだから、裁くのはやめて、人を赦そう」とあきらめずに御言葉を語ることが、隣人を愛するということです。それが、人が本当に苦しみから抜け出す唯一の道だからです。

「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出さない。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」

(黙示 3:3)

自分が信仰を告白したときのことを思い出す時、自分が救われたのは誰かが御言葉を語ってくれたからだということを思い出すでしょう。こうして、受けた恵みを忘れることなく、今後も神に心を向ける原動力とすることができる、そのことを聖書は教えています。「悔い改める」とは、神に心を向けることです。肉体の死はいつ訪れるかわかりません。その時後悔しないように、自分も隣人も神に心を向け続けたいものです。

人を救うのは神ご自身ですから、私たちが伝道しなくても救われてさえいけばよいのではないかと思うかもしれません。しかし、伝道することで、救われた人は信仰を告白するチャンスとなります。もし信仰を自覚することがなければ、この世の苦しみを抱き続けることとなります。たとえ伝道が困難であっても、その苦難は私たちの信仰を育て、信頼を増し加えます。伝道は、私たちが天に持っていける唯一の宝、愛を育てる機会となります。

「しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」(黙示 3:4-5)

「その衣を汚さなかった」とは、伝道した人たちのことです。「白い衣」とは、永遠の命です。「白い衣を着せられる」とは、文法的にも、前後の文脈からも、未来のことではなく、すでに「着ている」状態を表しています。例えば、この続きには「すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。」(黙示録 6:11)のように、過去形が使われています。「着せられる」とはいう日本語訳は曖昧で、永遠のいのちはこれから受け取る未来のものであると理解

しそうになりますが、そうではありません。あなたはすでに永遠のいのちを持っていて、すでに朽ちないからだを着せられたから、肉体の死と同時によみがえるというのが、聖書が一貫して教えていることです。だから、「いのちの書から名前を消すことはない」と、神は約束しておられるのです。これは、次の御言葉の言い換えです。

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」（黙示録 2:17）

私たちは古い自分に死に、新しく造られました。すべてを過去にするこの世に対して死んで、新しく生きるいのちが与えられたので、新しい名前が必要になったのです。神はその名をいのちの書から消すことはないと言っておられます。

つまり、神が私たちに伝えたいことは、伝道しないと救われないなどということではなく、あなたは白い衣をもう着せられているので、心配することはないということです。たとえ今、白い衣がうまく機能していなくても、あなたは神の国に行くから大丈夫だと神は伝えたいのです。このことのまとめとして、神は次のように言われました。

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」（黙示録 3:6）

また、イエス・キリストは、さらにわかりやすく次のように言っておられます。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」（ヨハネ 10:28）

私たちは、すでに持っている永遠のいのちを失うかもしれないなどと心配する必要はありません。でも、神があなたを赦したことを信じているのであれば伝道しなさいと、と神は語っておられるのです。伝道しないからと言って、自分をさばく必要はありませんが、神の言葉を受け取り、あなたの衣を生かして生きていきましょう。